

〔研究大会報告〕

第 15 回 JAMS 研究大会報告

第 1 日目報告

大塚直樹

日本マレーシア研究会第 15 回研究大会は、2007 年 12 月 2 日および 3 日の両日にわたり、立教大学新座キャンパスで行われた。ここでは、第 1 日目のシンポジウム「フロンティアから見たマレー（ムラユ）世界」の 3 本の報告要旨、2 本のコメントおよび総合討論の要旨をまとめた。

まず、本シンポジウムの総合司会を務めた弘末雅士氏から、趣旨説明が行われた。従来のマレー世界の研究は、マラッカ王国、ジョホール王国やジョホール・リアウ王国などマレー王権、すなわち「中枢」から行われてきた。しかし、マレー世界の研究では、交易慣行が一つの重要な構成要素とされており、他地域との交易ネットワークの構築方法ならびに他文化との関係を明らかにする作業が不可欠となる。したがって、マレー世界を研究するうえで、マレー世界の周辺部、つまりマレー人が交易関係を形成した地域の研究、具体的には大陸部における前近代のマレー人世界の報告も必要とされる。

以上のような問題意識に基づいて、このシンポジウムでは、遠藤正之氏「カンボジアにおける『マレー世界』の展開—15～17 世紀を中心に」、黒田景子氏「シャム（タイ）からみたケーク（ムラユ）世界—パタニ、クダーを巡って」、山本博之氏「1950 年代のマラヤにおける文化的混血者とマレー民族概念」という、3 つの報告が行われた。マレー人の交易活動は、これまで注目されてきた島嶼部のみならず、カンボジアやタイでも広範に展開していた。このフロンティアで生きた人びとの活動の展開を把握し、さらに当該地域における近世から近現代に至る「マレー民族」意識形成の歴史も検討することで、今後のマレー世界の研究についての論点を提示することが本シンポジウムの主要な目的とされた。

まず遠藤氏から、カンボジアにおける 15～17 世紀のマレー世界の展開に関する報告が行われた。カンボジアに居住するチャムと呼ばれる人びとは、現在のベトナム中南部から移住し、イスラーム信奉者としての意識を強く持っている。この報告では、カンボジアにおけるマレー世界の成立と展開の過程が検討され、当該地域におけるマレー人による商業ネットワークの形成要因に関する考察が行われた。

遠藤氏は、史料の分析を通じて次の 3 点を指摘した。第 1 に、海域世界の交易活性化に

ともない、森林生産物などの産地としてカンボジアの重要性が高まることで、交易目的で来航したマレー系諸族とチャンパー人が結びつき、15世紀末からカンボジアに「マレー世界」が形成され始めた点が挙げられた。特に、15～17世紀のヨーロッパ人の記録に「マレー人」が頻出する。この史料の記述を詳細に検討すると、記録に残された「マレー人」のなかには、かなりの数のチャンパー人が混在していた。つまり、カンボジアに移住したチャンパー人がいわゆるマレー人と混住するうちに、マレー語とイスラームを受容し、次第に融合して「チャム／マレー人」という一つの勢力を形成した。

第2に、15世紀末以降、東南アジアにおける交易活動が活性化すると、カンボジア全土、ラオス、ベトナム中部高原まで広がる「チャム／マレー人」の商業ネットワークが形成されたことが挙げられた。内陸後背地にまでマレー人の商業ネットワークが形成される現象は、他の東南アジア大陸部諸地域では観察されず、カンボジアに特有の現象といえる。またカンボジア宮廷でマレー語が使用されるようになると、マレー人は水先案内人兼通訳などの役割を担い、カンボジア王権との関係を深めた。

第3に、当時のカンボジア王権と「チャム／マレー人」との関係は一枚岩的に捉えることができない点が指摘された。たとえば、王に仕えて重要な役割を果たす「チャム／マレー人」がいる一方で、王権に抵抗する勢力としての「チャム／マレー人」も存在した。

フロアからは、なぜチャンパー人とマレー人との強い結びつきがみられたかという質問がされた。これに対する回答として、遠藤氏はチャンパー人とマレー人の身体的・言語的な特徴が類似していることを一つの要因として挙げた。

次に黒田氏からシャムからみたケーク（ムラユ）世界に関する報告が行われた。黒田氏は、シャムの中央政府が南部のマレー・ムスリム地域をどのように認識していたかを、宗主国としてのシャムと朝貢国としてのマレー諸国との関係を通じた考察によって明らかにした。

シャム中央からみると、マレー半島中部のクダー、パタニ、クランタン、トレンガヌの4つのマレー・ムスリム侯国は、アユタヤ朝の朝貢国としてシャムの支配下にあるとみなされていた。しかし、実際の支配体制はシャム王権・地方国・朝貢国という構造から成り立っていた。たとえば、シャムの仏教王を中心とする世界認識では、マレー侯国がシャムの辺縁に位置した。中央宮廷とマレー諸国が直接的に接触する機会は儀式的なものに限定されていた。シャム中央政府がマレー諸国に対して直接介入することはなく、ナコンシータマラートやソンクラウのような南部の有力地方国がマレー諸国における政争への介入、反乱の鎮圧にあたるという分節的な構造がみられた。

つまり、シャムの中央政府は、公的な立場としてクダー、パタニなどのマレー系朝貢国を対等に扱ったことがなく、この方針をパタニがタイ領内の一地方となる過程以降においても採用した。この分節的構造は、1821年に発生したナコンシータマラートのクダー侵略

に際して、ペナンの英国東インド会社によって当該地域のマレー諸国に対するシャムの支配が認められることで強化された。

シャム中央のマレー諸国に対するこの認識は、現在まで南タイ・ムスリム地域の自治・分離独立問題におけるタイ政府の基本的な立場を示している。たとえば、1909年に行われた当該地域に関する国境確定交渉は、シャムと英領マラヤとの間で交渉されるべき問題と考えられた。そして、シャム領となったパタニとサトゥーン（旧クダー）の問題は、あくまでタイ内政の中央集権制度、地方行政制度の問題として扱われ続けている。またシャムの中央政権は、タイ南部を、華人港市ソクラー等を中心とする華人交易ネットワークが展開する地域として認識している。したがって、シャムにとって、19世紀後半から20世紀前半に行われた世襲国主の廃止、国民化ないし中央集権化の過程は、華人のネットワークを「タイ化」して取り込んでいく過程として捉えることができる。

フロアからは、シャム中央と朝貢国との関係が分節的なものだとすれば、なぜ朝貢国がシャムの王都まで朝貢する必要があったのかという質問が出た。これに対して、黒田氏は、朝貢国はシャムの王国に忠誠を示すために、3年に1回、朝貢のため直接王都へ行く必要があったとの返答をした。

最後に、山本氏から1950年代のマラヤにおける文化的混血者とマレー民族概念に関する報告が行われた。この報告では、クランタンで華人の父親とシャム人の母親を持つ仏教徒として生まれ育ち、タイに移ってマレー人を名乗ってムスリムとなり、後に北ボルネオ（サバ）に渡ってサバ民族の創出を唱えた文筆家の「マレー民族」観が検討された。この作業を通じて、山本氏は1940～1950年代にかけてマラヤおよびその近隣地域で複数のマレー民族観が競合していた状況を明らかにした。

植民地統治から独立へとむかう過程で、インドネシア・ナショナリズムの思想に接したマラヤでは、マレー人右派やマレー人左派と呼ばれる人びとから複数のマレー民族観が提出された。マレー人右派は、マラヤのマレー人のみをバンサ・ムラユとして想定し、統一マレー人国民機構（UMNO）を結成した。これに対して左派は、土着ムスリムやインドネシアなども含めた大マレー国家を構想し、マラヤ・ムラユ民族党を結成した。

その後、バンサ・ムラユ概念が修正され、1955年の連邦参事会選挙においてUMNOを含めた連盟党が圧勝する過程で、「一つの国に三つのバンサ」という概念が提唱された。この概念はマレー人が中国系およびインド系の人びととの関係を考えるなかで創られてきた。同時にバンサは、「全国レベルでの意志決定に参加する資格をもつ枠組みとして相互に認知されるもの」、つまり「資格としてバンサ」としても捉えられるようになった。

これに対してマラヤの政治の主流と距離を置いていたK. バリは、バンサ概念を、身分差・階級差のない社会としてのバンサ、非マレー人を含むバンサ、バンサ・サバ、バンサの一要素としてのイスラーム教という点から捉えた。K. バリのバンサ概念の背景には、

華人を父にもつという出自、マレー語の学校へ入学できず、タイに移動してマレー人を名乗っていたこと、仏教からイスラーム教に改宗したことがなどがある。

以上の分析作業から、山本氏は、バンサ・ムラユ概念が状況によってさまざまな方法で解釈され、使い分けられていたこと、K. バリがマレー語を受容することで現地化していき、文化的混血者であり主流派にはなり得なかったものの、多様なバンサの創出という役割を担ったことを指摘した。

以上の3名の報告に対して、井口由布氏および伊藤眞氏からコメントおよび報告者への質問がされた。

井口氏は、ヨーロッパの人びとの「まなざし」から今回の報告を位置づけつつ、黒田氏に対しては、ケークの人びとは自らをどのようにみなしていたのか、山本氏に対しては、報告のなかにみられた「民族」と「バンサ」とは違うものなのか、「資格としてのバンサ」は報告者のオリジナルの表現なのか、K. バリのサバへのこだわりとは何か、またバリの描いたサバの将来像とはどのようなものか、との質問をした。

伊藤氏は、南スラウェシを中心としたブギス人社会との関連から、遠藤氏に対しては、18世紀のブギス人はカンボジアにおいて16～17世紀のマレー人の役割を継承してマレー人として振る舞ったのか、またマレー語を使用するブギス人とはどのような存在であったのか、黒田氏に対しては、マレー半島におけるマレー人とブギス人の関係はどのようなものであったのか、山本氏に対しては、サバにおける1940年代以降の混血ブギス人を中心とした団体はどのような活動を行っていたか、また自らをどのように位置づけてきたかとの質問をした。

コメンテーターの質問に対して、各報告者は以下のような回答をした。遠藤氏はマレー人とブギス人が「外部」からは区別されず、マレー人とチャンパー人と同じような関係性がみられたのではないかと、したがって西洋人にとってブギス語を使用する人びとはブギス人、マレー語を使用する人びとはマレー人と認識されていた可能性があるかと回答した。

黒田氏は、ケークという用語について、バンコクでは蔑視的な意味で用いられ、南タイでは蔑視のニュアンスがなく、ケーク、タイ・ムスリム、マレー・ムスリムやパタニ・ムスリムなどそれぞれの状況によって使い分けが生じていると返答した。ブギス人とマレー人の違いについては、現時点では南タイがブギス人の活動のネットワーク的な境界領域に位置していると考えており、今後、史料研究を進めていく上での課題であるとした。

山本氏は、バンサは民族の訳語であるが、民族というタームが文化的、政治的に多様な意味に用いられていること、それによって議論が煩雑になることを避けるため、バンサという語を報告で使用したと回答した。「資格としてのバンサ」については、バンサ概念が使用されるさまざまなコンテキスト、つまりマレーシアの人びとの実践を記述したものとして捉えており、表現としてはオリジナル性が強いとした。また、K. バリは外来者的な性

格をもっており、サバという特定の場が自らに何らかの利益をもたらすときに、その場所に対して働きかけをした。したがって K. バリの行動は「外来者のナショナリズム」という捉え方ができるとの返答をした。サバにおける混血ブギス人については、1980年代半ばにサバ生まれのブギス人がブギスを名乗るようになったことが、サバ団結党の結成やバンサとしてのサバを求める動きと共鳴している点が興味深いという返答であった。

フロアからは、マレー人とブギス人の歴史的な関係性、南タイにおけるムラユやジャーウィーの意味づけや認識について、K. バリにみられたバンサ概念のその後の展開やバンサ・マレーシアとの関係、バンサ・ムラユ概念が修正されるプロセスなどに関する質問が出された。また 19 世紀に入って、マレー世界がドラスティックに変化した可能性が指摘された。この質疑応答のなかで、個別の報告に関する議論は深められたものの、趣旨説明で述べられたような今後の具体的な論点を提示するまでは至らなかったように思われる。

そこで最後に筆者なりに今後の研究の展望として、フロンティアという概念の整理の必要性という点を提示したい。今回のシンポジウムでは、マレー世界のフロンティアにおける報告から、多様なマレー世界ないし差異の空間としてのマレー世界が提示された。多様性を提示することは、同時にその差異がそのまま固定されてしまう可能性も含んでいる。固定的なフロンティアを設定するのではなく、中枢との関係性のなかに位置づけられたフロンティアを想定する必要があるのではなかろうか。

また中枢と周辺という関係性は複層的に捉えることができる。マレー世界からみた中枢と周辺という関係とともに、そのフロンティアとしての場における中枢と周辺という関係もみられる。多様な関係性のなかに位置づけ、差異を明らかにすると同時に共通性も把握することで、マレー世界の深い理解に結びついていくと考えられる。このようなかたちで、今後、本シンポジウムの成果が東南アジアの大陸部と島嶼部を有機的に結びつけるような共同研究に進展していくことを期待したい。

第 2 日目報告

市川 哲・伊賀 司

日本マレーシア研究会の研究大会第 2 日目は第 2 セッションとして左右田直規氏（東京外国語大学）の司会の下で 6 人の方からの個別研究報告と、第 3 セッションとしてパネルが組まれた。

第 1 報告では市川哲氏（国立民族学博物館）による「世代と地域を通して見たマレーシア華人の多元的な現地化過程：サラワク華人のファミリーヒストリーを事例として」が報